

道の駅展示（三俣地域の歴史）

現在は人気のスキーリゾート地である三俣（みつまた）は、かつては、江戸（えど）の都と北の越後（えちご）地方との間にそびえる三国（みくに）山脈の麓にひっそりと存在していた宿場町であった。三俣を通る道は、徳川幕府（1603～1868）の時代に新たな重要性を帯びた。大名とその家臣たちが参勤交代に通る三国街道の一部に組み込まれたのである。宿場町としての歴史を振り返ると、三俣には周辺の地域の大名が定期的に宿泊しており、その中には越後国大名として名を広く馳せた上杉謙信（うえすぎけんしん）（1530～1578）も含まれていた。

江戸（現在の東京）からの旅行者は三国峠から清津川（きよつがわ）の平地までの危険な地帯を横断し、浅貝（あさがい）や二居（ふたい）、三俣といった宿場町に滞在した。大名宿舎としての設備を備えていた建物が4軒あったことからみてもわかるとおり、三俣はこれらの宿場町の中で最大の規模を誇り、最も栄えた町であった。しかし、その4軒の建物のうち、現在も残っているのは池田家（いけだや）のみである。1862年の参勤交代制度の廃止や、荷物の輸送方法が鞍袋から荷馬車へと変わっていったことで、街道沿いの往来は大幅に減少し、戊辰戦争（1868～1869）中には、官軍に敗れて逃げ出した侍たちによって浅貝と二居の町が破壊されてしまう。さらに1872年、政府が宿駅制度を廃止したことで、三国街道、三俣、および大名宿舎の衰退はさらに激しくなり、20世紀初めには三俣の賑わいはすでに大きく失われてしまっていた。

江戸時代（1603～1868）、三俣は地元のヒノキで作られる木工製品を主産業としていたが、その後19世紀中頃から第二次世界大戦までは木炭を主産業とした。村は1955年に湯沢町に合併された。